

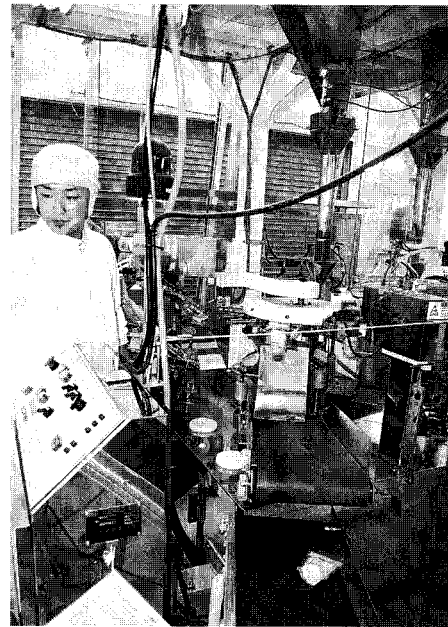
東北・新潟8新聞社共同企画

岩手日報社 東奥日報社 秋田魁新報社 河北新報社
山形新聞社 福島民報社 福島民友新聞社 新潟日報社

明日をひらく「地域力」～強み生かして②

本県の雑穀生産量は、2005年産で国内の約6割を占め、日本を誇る東北部や中山間地域では古来から代わる日常食として栽培されてきた。近年、食の安全・安心への関心が高まり、健康食ブームなども相まって注目される。県はブランド化を自指し、知名度や生産性向上などに力を入れる。各地域でも産地化への取り組みが続く。生産から販売まで一貫して担う花巻市の「プロ農夢花巻」と地域おこしを図る川井村の「かわい雑穀産直生産組合」を紹介する。

「雑穀王国」広がる産地化



本県産の雑穀をブレンドした小袋商品などを生産しているプロ農夢花巻の雑穀商品の加工工場＝花巻市太田

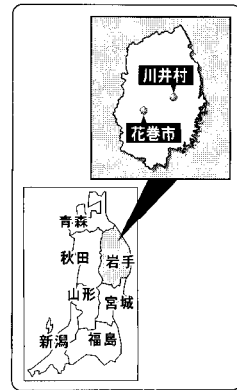
花巻 プロ農夢花巻

本県で加工・販売の中核を担うのが、花巻市の花巻農協(高橋専太郎組長)の子会社「プロ農夢花巻」(社長・高橋組合)だ。工場の増設、新商品開発など積極投資で「岩手ブランド」確立に向けた動きを早める。同社は2005年、雑穀商品の加工場を本社敷地内に建設した。男女の従業員11人が、複数種類の雑穀をブレンドして詰める小袋商品やスティックタイプの商品生産に励んでいる。

ブランド化 中核担う 加工・販売や新商品開発

花巻地方は全国有数の雑穀産地。15年ほど前に本県産という視点の加工中開地で栽培が推進され、以後、販作物として注目を浴び、都会を中心に「ヘルシー」症状に悩む人々の食料として需要が増が見込まれたことなどから青果があった。地球の水田農業ビジョンへの販作物として明確に位置づけられ、「一産地づくり交付金」による支援が追い風となり、平場でも生産が急速に拡大した。加工場の隣では今秋の稼働を目指す。新工場建設が進む。1億円超をかけた設備増強により、雑穀の処理能力を増やす。首脳陣などの大手スーパーや生協の注文に対応する。同社の雑穀販売は原料と加工品の比率がおおむね4対4。原材料販売の場合は産地としてのアピール力が弱いことが

岩手



脱サラし地域と連携 高齢者の技術を生かす

内の大手メーカー研究職いたんですよ。身近なことを辞め、田舎暮らしを求めて妻良子さん(50)と移住した有機野菜の生産販売で暮らすようになった。しかし現実には厳しい。研究職に火が付き、米に交えても、おいしく食べられる組み合わせを考案。原料調達、移住時から世話になっていた隣家の人に協力してもらい、地域の農家を回った。最初は農家の反応は鈍く、宮古市内の自然食品店で、東京の企業が販売した。岩手県産の雑穀ブレンドが、業者が安値で販売して目を留まった。県産の雑穀、数量もあまいだ。これに、東洋の企業が販売していた。これを販売できない。関係性を築くために、信じてくれたら、地域の者、倍ほどの値段で「一粒まで」適正に買い取った。

川井 かわい雑穀産直生産組合



徐々に軌道に乗り、99年に生産組合を設立。翌年には雑穀ブレンドを生産する工房を建設した。健康ブームも重なり、売り上げを伸ばした。組合を設立してから今年11年目。農家はほぼ変わらない。ほとんどの農家が70歳以上だが、「毎年生産するものがあつて生きがいになった」との声もあり、地域おこしにつながっている。職農園はソバ、ハトムギなど県内産の雑穀の販売も手掛ける。職農園は「地域で長年続いてきた雑穀栽培。産地で栽培するから無農薬でも良い品ができる。この品質とおいしさを守ってほしい」と意欲を語る。(岩手日報社)